

# 形態を基とした探究と挑戦

東京大学大学院医学系研究科人体病理学・病理診断学教授  
深山正久氏 (昭53卒)

若き日に肺割面の紋理の美しさに魅せられて以来、EBウイルス関連胃癌を中心として病理組織学的研究に取り組み続けてきた深山正久氏。形態学という古典的視座から、新たな秩序を発見しようと挑戦を続けてきた。病理診断医としても30年以上全身臓器の病変と向き合ってきた氏に、病理学の内包する可能性について話を聞いた。

——病理の道に進んだ経緯を教えてください。

1978年に大学を卒業後、当初は内科医になろうと思っていたのですが、2年間で放射線科をローテートしました。ローテート中、呼吸器内科に興味を持ち、一度はその道に進みました。しかし、呼吸器内科へ進んだ先輩に、呼吸器を志すのなら病理学を学んでおくべきだと助言され

たこともあり、1981年から都立駒込病院の病理科で診断業務に取り組みました。当時深い考えはなく、流れに身を任せ

たこともあり、1984年に神前五郎先生(元・大阪大医学部第2外科教授)が駒込病院の院長に就任された頃です。彼の研究テーマであったPST1(腺分泌性トリプシンインヒビター)について、組織中の分布を調べる研究を行ないました。PST1が全身臓器の神経内分泌細胞や神経内分泌腫瘍でも発現しており、「外分泌され



上での分子生物学的手法を学ばないといけないと思つたため、1989年に米国NIHのRonald G. Crystal先生の教室に留学しました。その教室では当時、Janhupisa欠損症や囊胞性線維症を題材に、遺伝子治療の開発研究を行なつていました。誰もが不可能だと思つてるところに果敢に取り組んでいく研究室の姿勢に影響を受けました。2年余り分子生物学的な研究に取り組むことができました。

1980年代後半になると分子生物学が研究の世界を席巻し、今後研究を行なっていく

後、次に取り組む研究テーマを考えた際、日本人に多い疾患

患を研究すべきだと思つた。当時の駒込病院では胃癌が多く、EBウイルスにも興味があったので、EBウイルス関連胃癌をテーマに選

EBウイルス関連胃癌は、胃癌全体の約10%を占め、EBウイルスに感染した胃の上皮細胞が腫瘍性に増殖する疾患です。EBウイルス関連胃癌の特徴は様々なものがあ

た特徴としては、複数の癌関連遺伝子プロモーター領域の CpG Islands に高密度のメチル化が高頻度に生じていることが挙げられます。すなわちエピジェネティックな異常が発癌過程に重要な役割を果たしていることが特徴と言えます。

EBウイルス関連胃癌が存在するということが証明しつつある段階です。DNAウイルスと宿主細胞の相互作用という観点から

現在、教室では他どのような研究を行なっていますか。

病理診断が形態学に基づいていることもあり、病理学を志す人は形態に

対する antibody が高いように思います。したがって研究自体も形態学から入ることが多く、日常業務の中で形態学的に抱いた疑問や仮説について、ある時期に症例をまとめて検証してみようという研究の形をとることが多いです。私自身、病理学研究は実際に生(ナマ)の病変に触れ、各々を識別しながら特殊な群を抽出してこれら

研究を行なっていく上で大切なことは何だと考えていますか。

上手に仮説を引き出し、重要な能力の1つだと思つています。また、戦略的であることも重要で、立てた仮説に対してどうアプローチするか、あるいはこれからの世の中は何を必要としているのかなど、あらゆる方面で戦略的に考えられることが必要だと思つています。そして、情熱を持って1つのテーマに徹底的に取り組むことが大切です。皆さんにはいかなる場面でも力を尽くして挑戦をし、医学を通じて社会に貢献していつてもらいたいと思つています。

——ありがとうございます。

## 基礎の

用という観点から

——研究を行なっていく上で大切なことは何だと考えていますか。

——研究を行なっていく上で大切なことは何だと考えていますか。

(編集部 佐藤大介 児山博亮 坪山幸太郎 松田和樹 多月文哉)